

Historian's View

NO. 35

□ワイズの楽しさ

- クラブライフを楽しもう！そして飛躍を
- 「クラブは楽しくないと・・・」
- ワイズ道楽論
- ワイズ道楽論の道とは？
- 楽しさは、人それぞれ
- ワイズライフを楽しむ
- 楽しさに不可欠なものは仲間意識
- 楽しいワイズの姿を見せよう

2011年5月10日 東日本区1998～2011 ヒストリアン 吉田 明弘

「ワイズライフを楽しもう！ そして飛躍を」

次年度区理事・河合重三さん（富士）の理事主題が発表されました。『ワイズライフを楽しもう！そして飛躍を』です。河合重三さんは、永く幼稚園の園長を務め、現在は幼稚園の理事長です。なんとなく、幼児相手のやさしいことばのようですが、これは、油断できません。なかなか手ごわいのです。

2000 - 2001 年度理事の服部幸一さん（当時東京グリーン）の主題にも、「楽しい」が入っていて、『心あわせて、楽しく前へ』でした。第1回区役員会で、ある役員が「^ら楽しんで前へ」と読み間違えて、それだけで楽しくなったことがありました。

何回か前の五輪の時でした。開幕前に日本の水泳陣のリーダー格の女子選手が「レースを楽しもう」と発言して、時の水連会長が激怒したことがありました。敗戦後、空腹をサツマイモで満たして猛練習し、日の丸を背負って泳いだ彼にとっては許せないことでしょうか、「リラックスして力を発揮しようよ」という発言だけであれば、女子選手の肩をもちたいと思いました。「^ら楽しんで」と言ったわけではないのですから。

「クラブは楽しくないと・・・」

故塩月賢太郎さん（当時東京西）が日本YMCA同盟総主事を退任した後、例会で隣合わせになり

ましたら、「クラブに来てまで、『奉仕』『奉仕』では息が切れる」と言われました。また、東京多摩クラブ（当時）が、例会の卓話で連続「福祉シリーズ」をやっていた時に、同クラブの山田公平さん（現アジア・太平洋YMCA同盟総主事）が、「福祉の話があまり続くのも・・・」と言われました。当時、塩月さんは、（社）日本キリスト教海外医療協会(JOCS)総主事、山田さんは、東京YMCA福祉専門学校校長でした。それだけの会話でしたが、ご兩人とも、『奉仕』も『福祉』も大切なことではあるが、それだけでは、クラブが、安らぎも勢いもないものになってしまう」と言いたかったのだらうと思います。

団体には、それぞれ目的があります。ワイズメンズクラブにも、目的と綱領があります。楽しむといっても、それは、ワイズの本来の目的・綱領に沿った上での話であることは当然です。それがあつてのクラブ活動であることは、ここで、これ以上触れません。

ワイズ道楽論

楽しむとは、どういうことでしょうか。辞書によれば、「楽しく思う」「心が満ち足りて安らぐ」「愉快になる」「期待をかけて、それを楽しむ」といった意味があります。

私は、「クラブ」と「楽しむ」から、「道楽」という言葉を思い浮かべます。

道楽には、酒色に溺れ、身を持ち崩して、身代を潰したというイメージがあります。しかしもう少し程度の軽い道楽もあります。釣り道楽に譬えれば、ワイズメンズクラブとの共通点があります。

- ① 動機はともかく、自発的、好きでやる。
- ② 身銭を切り、自分の時間を使う。
- ③ 工夫して、向上する。
- ④ 苦勞の割には成果が少ない。
- ⑤ 周囲、時には家族からも認められない。
- ⑥ 徹底しないと面白さがわからない。
- ⑦ 仕事よりも熱が入る。
- ⑧ 辛くても苦しくても続ける。
- ⑨ 仲間ができる。
- ⑩ 自分の中で何かが育つ。

道楽とは、あまり良いイメージがありませんが、新編大言海（富山房・昭和57年）によれば、「仏教にては、道ヲ解シテ自ラ楽シム（阿育王経）」とあります。

「楽しくなければワイズでない」と「楽しいばかりがワイズじゃない」という主張は、両方が正しいといえるでしょう。

ワイズの道楽論の「道」とは？

私たちの理想は、国際憲法が示す目的と綱領でありましょう。ワイズメンズクラブのバッジにある星は、キリスト誕生の時に、東の国の博士たち（ワイズメン）を、ベツレヘムの馬小屋に導いた星だといわれていますが、私は、ワイズメンが目指す理想をも表しているようにも思えます。

私たちは、いつも国際憲法を確認しながら、あるいは、聖書を片手に活動しているわけではありません。とっさに判断して行動しているのです。綱領も目的も、何かの時に、改めて深く読み返すものでありましょう。

ワイズの道とは、その目的に至る道程ではないのでしょうか。

道といえば、1977 - 1978年日本区理事の佐藤邦明さん（東京むかで）の理事主題は、『ひたすらこの道を往く』でした。1975 - 1976年国際会

長の鈴木謙介さん（当時東京）の国際会長主題は、「ワイズメン途上の出会い（Encounter on the Y's Men's Road）」でした。佐藤さんは、東京YMCAの少年部からYMCA活動に参加され、日本YMCA同盟委員長を務めるなど、YMCA一筋でしたから、YMCAとともに進むということが、ワイズメンとして最善の道だという思いがあったのでしょうか。

鈴木さんの「途上の出会い」は、単に道で人に出会ったというのではなく、聖書にある、パウロがキリストと出会った「ダマスコ途上」の出会いを彷彿させられます。これまでの自分の価値感を変え、生き方を変える出会いがワイズライフにあると、言いたかったように思います。

ワイズの楽しさは、人と出会い、その関わりの中で自分が磨かれていくことではないでしょうか。

楽しさは、人それぞれ

どこに楽しさを感じるかは、時代により、社会により、年齢により、ワイズのキャリアにより、性格や考え方により、あるいはその時の状況によって、さまざまであろうと考えます。また、「楽しさ」と、その反対である言葉、たとえば「つまらなさ」との間にはっきりとして線を引くことはできません。

会員増強のためには、楽しくなくてはいけないと、よく言われます。これが難しいのです。雰囲気、温いとか冷たいとか、銭湯の湯加減がぬるいとか熱いというのと同じで、人によって、感じ方が違うのです。

私の属している東京西クラブは、1997年以来、地域の人を対象に毎月、ウォーキングを行っています。参加者の中には、初参加のその日から、会の一員としての意識を持つ方もいます。一方、何年参加しても、参加費300円を払っただけのお客さんのままの人もあります。何かトラブルが起きた時に、その対応がはっきり違います。仲間意識のある人は、解決のために心を砕きます。そして解

決した時に喜びを表現します。お客さまの人は、問題が起きても、解決しても、われ関せずです。トータルすると、どちらが、ウォーキングを楽しんだとことになるのでしょうか。その判断も、人さまさまのようです。

また、仕事で経理を担当していて、普段は銭勘定ばかりだから、クラブで違うことをやれて楽しいと言う人もいれば、慣れた仕事だからクラブ会計くらいのこと役立てるなら嬉しいと言う人もいます。

何かのアイディアについて、みなで意見を出し合って、ひとつのものにまとめていく過程を楽しむ人もいますし、そんなことには興味がなく、出来上がった結果を楽しみたいという人もいます。

まさに人さまさまです。

ワイズライフを楽しむ

ワイズダムは、老若男女がメンバーです。ワイズメネット、ワイズリングも活動に加わりますから、人生のすべてのステージで楽しみ、学ぶことが出来ます。先輩の生きざまに接し、若者の感性に触れられます。他のクラブのメンバー、海外のワイズメンとの交流も楽しめます。クラブよりもっと多様な人が集まる YMCA の活動に参加することも可能です。

国際大会をはじめ、地域大会、区大会、部会など、他クラブとのイベントもあります。ワイズメンは、どの会合にも参加でき、歓迎されます。

もし、入会以来、一度もクラブ会長から、個人的に、区大会などの参加を誘われていなければ、クラブ会長や先輩メンバーの怠慢です。

クラブブリテンでいろいろな会合案内を見ると、会費が、何千円というのばかりです。高級レストランでメニューを見る思いで圧倒されます。ワイズの会合の会費のほとんどは、会場に支払う費用ですから、会費が高いからといって楽しさを保証するものではありません。全部に参加する必要もなく、そのときの自分の事情に合わせて、面白そうなものをお好みでチョイスすれば、お値打

ちイベントは、いくらでもあります。

楽しさに不可欠なものは仲間意識

商品の販売促進とは、販売を阻害するものを取り除くこと、と言われた時代がありました。たとえば、その商品をお客さんが知らないなら広告をすとか、どこで買えば良いのか分からないなら店頭陳列量を増やすとか、商品の使用方法が難しいなら販売員教育を行うとかです。

クラブであれば、楽しさを阻害する要因を取り除くことが正解です。ところが、これが難しいのです。組織的、構造的な問題（たとえばプログラム内容とか会費など）であれば、解決が早いのですが、つまらなくする要因のほとんどが、人と人との連絡と応答にあるのです。ここにクラブによって、人が人の中で磨かれるという意味の一面があります。

自分自身がまったく気づかない、むしろ良かれと思ってやっていることが、他の人に、つまらない思いをさせていることがあります。自分で気づいて改めるか、注意してくれる仲間に感謝するほかありません。

しかし、このようなことを山ほど数え上げても、つまらなくする要素は消えないでしょう。そもそも人間に起因することですから、あまりこの撲滅運動に熱心になると、逆に楽しさを失ってしまいます。

その組織に本当に関わりを感じ、一員であるとの仲間意識をもつ人は、ちょっとしたつまらなさには、くじけません。これをどう育てるかです。

楽しさは特権でなく義務

世界赤十字社の創設者であり、世界 YMCA 同盟の生みの親であり、ノーベル平和賞受賞者のアンリー・デュナンの伝記『私のアンリー・デュナン伝』（橋本祐子・学研・昭和 53 年）に、次の一文があります。

「幸福は特権でなく義務である。人間はひとりひとりが幸福になる義務がある。特定の人がひと

り占めするものではなく、分ける義務を負ってこそ人間の真の幸福があるのだ」。この幸福を楽しむに置き換えると「楽しさは特権ではなく義務」ということになります。

楽しいワイズの姿を見せよう

「ワイズは出会いと関わりの中で楽しむ」ものだと思います。それが、さらに新たな「出会い」をもたらすのでしょうか。

東京 YMCA 江東センターには、幼稚園があります。ここのバザーで、東京江東クラブは毎年、焼そばを大量に販売します。楽しそうに、にぎやかに、しかも一生懸命やって、成果を喜び合っているワイズメンを見て、自分もやらせてもらいたい、クラブに加わりたいと希望する園児のお父さんもいるのです。

河合重三次期区理事の方針は次のように締めくくられます。

「ロースターに登録しているだけでは何の価値もありません。参加して活動して、はじめてワイズメンです」。「ワイズメンが楽しそうに、生き生きと、行動する姿を見て、大勢のゲストと一緒に参加して、やがて多数のゲストが仲間としてメンバーになることでしょう」という光景なのでしょう。

ほらごらん、手ごわいでしょう。

あとがき

日本区のお年玉切手シート集めは、1972年に始まり、予想以上に集まったことから、日本区はこれをアジア資金として、BFから独立してアジアとの交流に用いることになりました。1973年に、私は、資金の援助で韓国区大会に参加しました。

初めて見た韓国は、一部に敗戦直後の日本の様相がありました。ソウル駅は薄暗く、靴磨きの少年が通行客に声をかけていました。夜12時を過ぎると外出禁止令で人も車も通りから消えました。米食の制限もありました。心なしか人々の表

情も厳しく見えました。

過去の歴史もそうですが、朝鮮戦争を復興の足がかりとした日本、その南北対立の重荷のある韓国、しかも38度線そのものも旧日本軍にかかわりがあるわけです。申し訳ない感じを抱いて、大田市の区大会会場に入りました。

ものすごいエネルギーに溢れていました。特に、クラブごとに色とりどりの鮮やかなチマチョゴリをまとったメネット、弾けるばかりの明るさには圧倒されました。まったく別世界でした。

韓国ロビーと言われる事情通の日本のワイズメンが、「解放なんだよ」と教えてくれました。つまり、儒教の影響で家や親を意識している女性たちが、ここでは家も男女も長幼もなく楽しんでいるのだということでした。

儒教についての知識がありませんが、そういう社会の考え方との関係というものがワイズの楽しさに影響することはあるだろうな、と思いました。

戦後の日本のワイズメンも、民主主義を肌で実感できるワイズの活動を楽しんだのではないのでしょうか。これは、現代においても、良い意味での民主主義をある程度、実現した国と、まだ達成過程での国とでは、ワイズメンの楽しみが違うのではないかと思います。

実は、EMCシンポジウムなどで、会員が増えないのは「楽しくない」からだという意見が出ると、困惑します。こちらは、もともと面白くない人間だという意識がありますから、古くからいるだけに責任を感じてしまいます。楽しくしようといっても、どうしたら良いのか、わからないのです。楽しくなくする方法は、いくらでもあるのですが・・・。

また、楽しくするというと、すぐ二次会をやったら良いという意見が出ます。二次会というと、私には、だんだんアルコールが強くて濃くなっていく、うさばらしというイメージがありますが、ワイズの二次会は、例会では話し足りないから、もう少し話して（場合によっては卓話者も交え

て)、少しくつろいでから、帰ろうと言う意味で、アルコールがなくて、コーヒーショップでもという意味のようです。

多少、過激な例もあります。熊本の若い人の多いクラブのメンバーが東京に転勤になって、都内のクラブの例会をいくつか訪問した時の感想です。「東京のクラブは例会が終わるのが早いですね。熊本では例会といえれば徹夜覚悟です」。東日本区でも、若い人が多く、例会の閉会間近でないとか来られない人がいて、二次会で顔が揃うというクラブがあります。これがこのクラブのエネルギーとなっています。

二次会の問題は、やはり参加する人とならない人の情報格差や意識のずれが出てしまうことです。これは意識した方がよいことです。

私が10年間過ごした東京目黒クラブには二次会と言うよりも、例会や役員会が終わった後、どこかに寄るという習慣がまったくありませんでした。夜8時30分に閉会して、車で帰ると9時には家に着きました。1カ月のうちで、ワイズの日が一番早く帰宅する日でした。それで十分楽しかったのは、どうしてだったのか、理由はまったくわかりません。私がクラブ9代目の会長になった時は、在籍19人ながら、後に会長になるメンバーが10人もいて、早く会長になりたいために、他クラブに移籍した人がいたと言われるほどでした。例会や役員会のときから、アルコールが入っているのではと思うほど賑やかでした。

昔話が続きます。

1966年の日本区大会は、読売ランドで行われました。東京目黒クラブが、チャーターナイトを行ったひと月後でした。初めて参加した私には記憶が鮮明です。

会場は、多摩丘陵に新設された遊園地の中の修学旅行の生徒のための宿泊施設、駅前のタクシーには「地方学生のホテル」と告げました。

午前10時30分から開会式。続いての特別記念講演は、読売新聞社社主・正力松太郎氏の原子力の平和利用の話で、なにか威張られた印象があ

りました。昼食を挟んで、代議員会報告、分団協議が夕方まであって、夕食となりました。生徒が使う食堂で、テーブルと椅子が一体となっていました。食事の内容は記憶にありませんが、前述の鈴木謙介さんが、「ちくわのてんぷらが出た」と、後々まで言っていたそうです。アルコールはありませんでした。

午後7時30分から懇親パーティー。460人が体育館のような場所に輪を作って座りました。岩越重雄元理事（当時大阪）が司会でした。加盟したばかりの東京韓国クラブのコメントたちの踊りがありました。その後、就寝まで、どうして時間を過ごしたか記憶がありません。何しろ真っ暗な、自動販売機もない山の中でしたから。

修学旅行会館ですから、個室でなくカイク棚のベッドだったと思います。新婚ほやほやだった、村野繁さん・絢子さん（東京目黒）も記憶がないそうです。家族の「分解掃除」が好きな、東京山手クラブがホストでしたから、家族が分かれて寝たのでしょう。

翌日は、7時から早朝礼拝に始まり、分団協議などの報告、表彰式、新旧役員を紹介、この年、ホノルルで開かれる国際大会に参加する人たちの結団式がありました。正午に閉会となりました。

今だったら、ひとつひとつに苦情が殺到というところでしょうが、私には、とても楽しく感じ、その模様を多くの友人に話した記憶があります。それが何かは、分かりません。そこに何かがあったのだらうと思います。

もしかしたら、新しい人間関係に触れた楽しさかもしれません。それまでは、家族を別にすれば、年上の人とは、教師とか、職場の上司とか、学校の先輩といった、上下（タテ）関係だったのが、大会では、年齢を超えた、ヨコの対等の関係で、仲間として迎えてもらえたこと、本音の中年男性をナマで見られたことが、楽しく感じられたのかもしれません。